

訳せない日本語

～日本人の言葉と心～

大來尚順

OGI, Shojun

はじめに

私は現在、僧侶である傍ら^{かたわ}、日本語と英語を使い、主に仏教関係の通訳や翻訳の仕事をしています。

実は、日本の大学を出た後にアメリカの大学院へ進学し、西洋文化圏で仏教の研鑽^{けんざん}を深め、さらにアジア諸国を放浪しながら仏教を学んだという、少し風変わりな背景を持っています。

今日、こうした仕事を始めて十年が過ぎました。振り返れば、有り難いご縁に巡り合い、次から次へと通訳や翻訳の仕事に携わらせていただきました。

中には難解な仕事も多く、四苦八苦しながら乗り越えてきた歲月でしたが、こうして多くの経験と知識を得ることができたからこそ、自身の中で常々違和感を覚えていたことがありました。

それは、どうしても「日本語には、ニュアンスを英語では伝えきれない言葉がある」ということです。

繰り返し出てくる何気ない日本語を英訳するにあたって、訳してもどこかしっくりこない言葉が数多くあったのです。

しかし、これまではそうした違和感をもちつつも、決まった対訳を使ってきました。

そんな中で、私自身まだまだ未熟ながらも、ある程度の通訳や翻訳の経験を重ねてきた今、「なぜ日本語のニュアンスを英語では伝えきれないのか」ということについて考える余裕を持てるようになってきました。

そして、ようやく気がついたのが『英語に訳せない日本語の中にこそ、他の国や文化にはない日本独自の奥深さが宿っているのではないか』ということです。

本書では、私たちにとって馴染み深い二十四の日本語を例にし、それぞれの言葉の奥に隠されている深い意味を綴っています。

ぜひともこの本を通じて、普段何気なく使っている「日本人の言葉と心」を振り返るきっかけにいただけたら幸いです。

平成二十九年四月 大來尚順

第1章 あいさつの言葉に隠された温かな思い

01	いただきます	12
02	ごちそうさまでした	20
03	いってきます	26
04	おかえり	34
05	よろしくお願いします	42
06	お疲れさま	50

第2章 何気なく使う言葉に含まれる「和」の心

07	失礼します	60
08	すみません	66
09	しょうがない	74
10	せっかく	80
11	大丈夫	88
12	どっこいしょ	94
	コラム…日本語の会話を成り立たせる高等技術	100

第3章 日本人の心に根ざした言葉

13	ご縁	106
14	つまらないものですけど	114
15	もったいない	122
16	こつこつ	130
17	おかげさまで	136
18	微妙	144

第4章 日本文化に育まれた奥深い言葉

19	合掌	154
20	さりげない	162
21	風情がある	168
22	敷居が高い	174
23	おもてなし	182
24	気が利く	190
	おわりに	198

第1章

あいさつの言葉に
隠された温かな思い

あいさつの言葉に隠された温かな思い

「いただきます」

● 思い出のある「いただきます」

日本人の習慣として口にする言葉のひとつに、「いただきます」があります。実は、この言葉は私の大好きな言葉のひとつで、自分にとってはちょっとしたエピソードがあります。

私は小さな頃から、ごはんを食べるときは、テーブルに座り食卓に並んだ料理を目の前に、手を合わせ、大きな声で「いただきます」と叫び、母の「はい、どうぞ」という声を聞くまで決して食べませんでした。

ときには、母が庭の掃除で外にいることもあり、そのときは、外にいる母に聞こえるように張り裂けんばかりの声で「いただきます」と叫び、それに対して母も負けじと「はい」という声を張りあげて返事をしてくれていました。そんな私と母の掛け合いの思い出ということもあり、この言葉を大事にしています。

その後も、小学校、中学校、高校、大学、そして留学のためアメリカへ行っても、食前の「いただきます」は、自身の変わらない習慣として大切にしてきました。

今ではさすがに「いただきます」と叫ぶことはありませんが、外食の際のお店でも、移動中の飛行機の中でも、**どどこいようと食事をするときは、必ず手を合わせて、「いただきます」を口にします。**

そんな中、以前、こんなことがありました。

あるとき、出張でイギリスへ行くことがありました。長時間のフライトで唯一の楽しみは、機内での食事です。その食事をいただくとうと、いつも通りに手を合わせ「い

いただきます」と口にしました。

すると横に座っていらしたイギリス人の方に、「素晴らしい」と日本語で褒められました。お話ししてみると、その方は日本にもう十一年も住んでいらして、福岡県内の大学で英語を教えていらつしやる方でした。

私が機内であまりに堂々と手を合わせて「いただきます」と口にしているものだから、驚いたそうです。

これがきっかけで、私は自分が僧侶であることも明かし、「いただきます」の意味をはじめ、**日本文化について考えることになりました。**

そして、「いただきます」を英語にするなどのようになるのか尋ねると、イギリス人の先生は、僧侶の立場からどのように英語にするのか興味深いので聞かせて欲しいと、逆に尋ねられました。

そのとき、初めて当たり前のように使っていた「いただきます」という言葉の意味を私自身、深く考えました。

●「いただきます」の意味

食前に口にする「いただきます」の意味を尋ねられると、一般的には食事を作ってくださった方々への感謝だと答える方が多いと思います。

もちろん、この感謝の気持ちも含まれていますが、実は真意はもっと深いものです。

本来「いただきます」の前には「いのちを」という言葉が隠されているのです。これを英語にすると「I take your life.」（私は「いのちを」奪う）となり、ストレートでわかりやすくなります。

つまり、私たち人間は、動物、野菜、空気中の細菌やウイルスを含め、他のいのちの犠牲なくしては生きていけないのです。

言い換えるならば、**私たちは常にさまざまな「いのち」を支えられて、「生かされ**

つる」GJす。

この意味を踏まえると、まず「いただきます」と口にして思うべきことは、「申しわけない」という他のいのちへの懺悔ざんげなのです。すると必ずと頭が下がります。そして、**そこから感謝が生まれてくるGJす。**

ですから、一案として英訳は「I am so sorry for taking your life and greatly appreciate receiving your life.」（あなたのいのちを奪ってしまふ、申し訳ありません。有り難く「いのち」を頂戴いたします）と表現できると思います。

また、「いただきます」に漢字を当てるとなれば「頂きます」になります。「頂き」とは頂上を意味します。本来ならば、大切な他の「いのち」は尊敬の念を持って高いところから授かるものです。

しかし、実際に私たちが食事をしようとするとき、料理となって目の前に並ぶさまざまな「いのち」は、私たちの頭の位置より低い場所にあります。

よって「いただきます」と言うときには、合掌しながら頭を下げて、他の「いのち」に対して尊敬の念を伝えるのです。**実は、動作の中にも「いただきます」の真意が込められているのです。**

●「いただきます」を支える精神

しかし、ふと思うことは、「いただきます」という深い懺悔と感謝の気持ちが込められた言葉が作り出された背景には一体何があるのかということです。私はここに、日本人の「凡夫」（ぼんぶ／ぼんぶ）としての自覚があるのだと思います。

「凡夫」とは、仏教用語の一つで、「煩惱を断じていない愚かな私たち」のことをいいます。

私たちというのは、煩惱ぼんのう（貪むさほること・怒ること・無知であること）を持つがゆえ

に自他共に傷つけながら生活しています。

他を傷つけたくはないと思っても、結局は傷つけてしまうことや、結果的には傷つけてしまっていたということがあります。

言い換えれば、私たちは巡り遇わ^あせ（これを縁とも呼びますが）次第では、何をしでかすか分からないとても不安定な存在です。**ここに人間の罪悪性があります。これが「凡夫」の姿です。**

しかし、大切なことは、「凡夫」の自覚で終わらないことです。せめて意識できる自らの悪に対しては懺悔し、**感謝の気持ちを持って生活しようというのが、日本人の素晴らしい精神なのだと思います。**

その精神の現れとして、「いただきます」という言葉と、頭を下げる動作が生み出されたと考えられます。

しかし、昔と比べると、今日の日本では「せめて意識できる悪」の認識の具合が低下しているように思えます。

これは、「いただきます」という言葉の意味が表面的な内容でしか語られなくなっていることにも表れているのではないのでしょうか。

また、テレビ、インターネットなどのメディアを通して、信じられないような悲しい事件が目や耳に飛び込んでくる現実にも関係しているように思えます。

言葉だけではなく、その言葉の真意や精神をも引きついでいかなければならないと、「いただきます」という言葉の意味を考える中で学ばせていただきました。

あいさつの言葉に隠された温かな思い

「ごちそうさまでした」

● 忘れがちな言葉

食前の「いただきます」という言葉はよく口にしても、お腹が満腹になってついっ
い食後の「ごちそうさまでした」という言葉を忘れがちになってしまう人が多いので
はないでしょうか。

実は私もそのひとりです。幼い頃からの習慣で、必ずといっていいほど食前には
「いただきます」を口にしていますが、急いでご飯を食べ終わったときなど、手を合
わせるだけで、**「ごちそうさまでした」の言葉をおろそかにしてしま
います。**

ここで思い出すのが、アメリカに留学していたときのことです。ある年のサンクス
ギビングデー（感謝祭）の際、私は友人のキリスト教牧師の家に招待されました。ち
なみに、サンクスギビングデーとは、アメリカやカナダの祝日のひとつです。

現在では、日本のお正月のような意味合いを持ちますが、もともとはアメリカ大陸
に移住したイギリス人が初めて収穫を迎え、その恩を神に感謝し、収穫に際し手助け
してくれたネイティブアメリカンに、お礼として食事をふるまったことに由来すると
いわれています。

友人牧師の家を訪問すると、友人の家族や仲間が大勢いました。そして、一緒に食
事の準備をして、**いざ食べようと食卓に着くと、友人牧師の発声とともに皆が隣の人
の手を握り、食事をいただく恩恵と「いのち」の繋がりに感謝する、食前の折りが始
まりました。**

私も見よう見まねで参加しながら、西洋にも食前のことばがあることに感心したのを覚えています。そんな中、私がついつい手を合わせて「いただきます」と口にしたことから、**食事**中の会話のテーマは日本語の食前食後の「いただきます」「ごちそうさまでした」の言葉の説明に押し流されました。

しかし、残念ながら当時の私は、英語で「ごちそうさまでした」を説明することができませんでした。なぜならば、その意味を深く考えたことがなかったからです。

●「ごちそうさまでした」の意味

一般的には、「ごちそうさまでした」は英語では「Thank you for the wonderful meal.」（素晴らしい食事をありがとうございます）、「It was a great dinner.」（素晴らしい夕食でした）などと表現され、**食事をいただいたことへの感謝の意味**が表現されています。

これは、「ごちそうさま」という日本語の本来の意味にも通じています。「ごちそうさま」とは、元来食事などのおもてなしをするために、あちらこちらを走りまわり、**食材を求めた苦勞に感謝する言葉**です。実は、この言葉のルーツは、仏教にあります。

もともとはバラモン教の神さまで、仏教に取り入れられて護法神（仏法や仏教徒を守る神）の一体となった「韋駄天^{いだてん}」という神さまがいます。「韋駄天」は、お釈迦さまが亡くなった後、お釈迦さまの歯を盗んだ盗人を駿足で追いかけて捕まえ、その歯を取り戻したという言い伝えがあり、これが足が速い人のことを「韋駄天」ということの由来になっています。

「ごちそうさまでした」の「ちそう」は漢字で「馳走」と書き、「走り回る」という意味を持つ言葉ですが、「韋駄天」が駆け巡って食物を集めたことに由来します。しかし、この言葉はおもてなしをする「美味しい料理」という意味に転じられ、「**ごち**

そうさまでした」は「美味しい料理」(ご馳走)をいただくことや、その準備をしていただいたことに感謝する言葉になったようです。

●「ごちそうさまでした」の英訳に学ぶ

しかし、私はどうも通常の英訳に寂しさを感じずにはられません。なぜならば、これらは食事を摂取できた感謝の気持ちにフォーカスされ、そのご縁の中身には触れることなく、**表面的な意味しか表現されていない気がするからです。**

ここで注目したいのが、食前の言葉である「いただきます」の解釈です。「いただきます」を「いのちをいただきます」と意識すると、「ごちそうさまでした」の意味は、それに対応して「いのちをいただきました」となり、英語では「I received your life.」となります。

また、「いただきます」に含まれる懺悔と感謝の深意を抽出して、「多くのいのちを奪ってしまい、申し訳ありません。有り難くいのちを頂戴いたします」と解釈すると、「ごちそうさまでした」は「有り難くいのちを頂戴いたしました」という意味となり、「I am so sorry for taking your life and greatly appreciate to having received your life.」と英訳できます。

つまり、「いただきます」の解釈によって、「ごちそうさまでした」の意味も変化するのです。「いただきます」の解釈が深いほど、それに比例して「ごちそうさまでした」の解釈も深くなり、英訳した際に人間の内面が詳しく表現されるようになります。英訳することで、何を思い「ごちそうさまでした」という言葉を口にすべきなのか明確にすることができました。**食前の言葉である「いただきます」とともに、大切にしたいと思います。**

「いってきます」

● 習慣の言葉

毎日使う言葉の一つとして「いってきます」があると思います。仕事へ行くとき、学校へ行くとき、お出かけするときなど、見送ってくれる人やペットに「いってきます」と声をかけてから、家を出られる方が多いと思います。

私は、十八歳のときに京都の大学に通うために、地元山口県を離れました。

その頃から、夏休み、冬休み、春休みなど長期の休みを利用して実家のお寺に帰省し、また京都へ戻るとき、本堂に安置されているご本尊（寺院などで礼拝の対象となる最も大切な仏を意味し、浄土真宗では阿弥陀如来を指す）さまとお内仏（寺院の本

堂とは別の場所にある家族用の仏壇）に手を合わせ、「いってきます」と挨拶をするようになりました。

この習慣は私の中で今でも続いています。現在、私は主に東京を拠点として山口との行き来をする生活していますが、必ず東京へ出発する前には本堂とお内仏に「いってきます」と挨拶をしています。

「いってきます」という言葉は、当たり前過ぎて、逆に深く考えたことがない人や意味を忘れてしまい、出発前の決まり文句として使っている方も多いのではないだろうか。

実は、私自身、アメリカで生活するまで「いってきます」という言葉の意味を誤解していました。

その当時、私は「いってきます」をどこかへ行く前の掛け声や家族に出かけることを伝える合図と理解していました。

アメリカで生活を始めた当初は、どこかへ一方的に「行くこと」や「出発すること」を強調する言葉として、「I am going.」(行きます)、「I am leaving.」(去ります)、「I am off.」(出発します)と言っていたのです。

しかし、実際にネイティブの方がこのような表現を使うことは、めったにありませんでした。その代わりに使っていた表現が、「See you later.」(また後で会いましょう)や「See you around.」(またね)でした。

これは再会の願いが込められたとても素敵な表現で、ただどこかへ出かけることを伝えるニュアンスで使う日本語の「いってきます」より、**よほど温かみのある表現だと感心していました。**

●「いってきます」の根底

しかし、これは**私の誤解**だったのです。日本語の「いってきます」に漢字を当てはめると「行って来ます」となり、「行って帰ってくる」ことを意味します。

つまり、日本語の「いってきます」にも同じく再会の願いが込められており、実は「I will be back.」(戻ります)や「See you again.」(また会いましょう)と英訳することが可能です。

そうすると、「**いってきます**」と**サレタの言葉**もある「**いってらっしゃい**」も「**無事に帰って来てほしい**」と**再会の願いの意味を帯びるのです。**

英語では「Come back safely.」(無事に帰って来てね)、「Have a good time.」(楽しんで来てね)というような表現になると思います。

また、「いってきます」という日本語は、さまざまな場面で異なったニュアンスを生みます。

例えば、大事な仕事があって、朝の出勤時に気合を入れて「いってきます」と言っ

た場合、その意味は「仕事を頑張ってくる」というものになり、「いつてらっしゃい」は「頑張ってる」という応援の意味になります。

実際、私が毎回山口から東京へ戻る前にお寺で手を合わせるときの「いつてきます」は、「頑張ってきて来ます」という思いが強いのです。

このように「いつてきます」は、その言葉を発する人の状況や心持ちによって、多様な意味を持ちえます。

そして「いつてらっしゃい」の意味も、その多様性に連動します。しかし、**その根底には「また会いましょう」という再会の願いがあるのです。**

●再会の場所

ここで私が一つ思うことは、再会する場所です。

普段、私たちは多くの場合、当然のように家や出発した場所に帰ってきて、また見送ってくれた人と会えると思って生活していますが、これはまったく当たり前ではないのです。

どこで何が起こるかわからないのが世の常です。突然の事故や事件に巻き込まれることなく、**無事に帰って来ることができる保証はどこにもありません。**

多くの方はこのことは頭ではきちんとしていますが、有り難いことに、これまで偶然にも何度も戻って来ることができているがゆえに、自分はこの現実には当てはまらないと錯覚しているのです。

本当は誰もが不安定な現実の中で生活しているのです。**だからこそ、「いつてきます」には再会の願いが込められているのです。**

しかし、このようなことを考え始めると不安や心配にはきりがありません。極端な話、どこへも行けなくなってしまうのではないのでしょうか。

私にはそんな動揺する気持ちを落ち着かせてくれる言葉があります。それは「俱会くゑ一処いっしょ」という言葉です。

これは仏教用語の一つで、「俱ともに一つの処ところで会う」、再会するという意味を持つ教えであり、とくに浄土真宗で大事にされています。この「一つの処ところ（場所）」とは、「浄土じょうど」を指します。通常、「浄土」とは亡くなった後に往ゆく世界だと認識されます。

正確には、煩惱だらけの身であるがゆえに、この現世では仏（目覚めた人／悟った人）になれなかった方が、亡くなった後に往く、仏となるのに最適な環境である阿彌陀仏の住む世界を「浄土さいほう」（西方浄土／極楽浄土）といいます。

この「浄土」での再会の願いが込められた言葉が「俱会一処」です。

これは、私が死んだ後に往くことのでき、また亡き大切な方々と再会できる場所があるという心の拠りどころとなる世界観です。

どこへ行こうが、最終的には必ずまた会える場所がある。私は「いつてきます」という言葉は、そんな世界観に支えられていると思うのです。

ひよっとしたら「いつてきます」という言葉は、今一緒にいる方との時間の大切さをささやいてくれているのかもしれない。

しっかりとそのささやきに耳を傾けて生活したいものです。

あいさつの言葉に隠された温かな思い
「おかえり」

● クスツと笑う「こんにちは」と「おかえり」の掛け合い

現在、私は仕事の関係上、主に東京で生活しています。しかし、月に一度か二度のペースで、法務（説法、法事、法要、お葬式などのお寺の仕事）のお手伝いのため自坊のある山口県へ帰省しています。

ただ、自坊が田舎に位置していることもあって、移動だけでほぼ一日が潰れかねないのですが、あまり苦には思っていません。それには理由があります。

自坊に着くと、景色一面に田んぼ、畑、山、広い空が広がっています。そこからは田んぼの手入れをしたり、畑の草取りを一生懸命している近所のおじいちゃんやおば

あちゃんたちがいます。

私は皆さん一人ひとりに大きな声で「こんにちは」と挨拶をします。そのとき、必ず返ってくる言葉が「おかえり」です。私はこの「おかえり」という言葉が聞きたくて帰省しているところもあります。

ここで少し不思議に思うことは、なぜ「こんにちは」と挨拶したのに、返事が「こんにちは」ではなく「おかえり」なのかということなのです。

実は、これは私が昔から不思議に思っていたことの一つです。私の通っていた小学校は家から遠く、当時はバス通学でした。

そして帰り道、バスを降りるといつも近所の方が畑で仕事をされている姿が目に入り、大きな声で「こんにちは」と挨拶すると、必ず田んぼや畑から「おかえり」と大きな声が返ってきていました。

なぜ「こんにちは」という返答ではないのか疑問でしたが、この噛み合わないおか

しな会話にクスツと笑いながらも、どことなく迎え入れられたような、自分の居場所に帰ってきたような、そんな居心地のよさを感じることができ、あまり気にしないようにしていました。

「この不思議と何か温かく包まれているような感覚を与えてくれる」「おかえり」という言葉は一体何なのでしょう？ また、その言葉を口にする人々はどんな思いを持っているのでしょうか？

●「おかえり」という言葉の本来の意味とは

私は高校卒業後、勉強のために地元を離れ京都の大学へ進学し、アメリカ留学を経由して地元に戻り、はじめてこの「おかえり」には、とても奥深い意味と温かな気持ちが届められているということに気がつきました。

アメリカでの生活を終え、帰国して一時的に地元に戻ったとき、たまたま畑の中で仕事をしていた近所のおばあちゃんに「こんにちは」と声をかけたことがありました。すると、しばらく見かけていなかったこともあって、私が誰なのか分からずちよつと首を傾げて考えたようです。

しかし私が誰なのか気がつく、「わ、^な尚ちゃん（小さなころから近所で呼ばれる私のあだ名）、おかえり!!」と、近くまで寄ってきて、とびっきりの笑顔で迎えてくれました。

そのとき、本当に戻ってきたという思いで、何とも表現できない安心を覚えました。

「おかえり」という言葉とは、**まさか」「よく無事に戻ってきたね」「あなたを待っていたよ」「あなたには、そのままで帰ってほしいところがあるんだよ」というメッセージでもあるのです。**

「帰ってこられるところ」「ところ」とは、家族の待つ家であったり、地元であっ

たり、「場所」の意味もありますが、私は「あなたをあなたのまま、そのまま優しく迎え入れて受け止めてくれる人や空間」をも指すと思うのです。

「おかえり」を英語で考えてみると、日本語の「おかえり」という言葉の奥深さがよく分かります。「おかえり」は日本語の意味合いを考えて、英語では「Welcome back.」（よく戻ってきたね）、「Welcome home.」（ようこそ家に）と翻訳される¹⁾とありますが、実はこれはとてもぎこちない表現です。

余談ですが、「ただいま」は英語で「I'm home.」と訳されることがありますが、これもおかしな英語です。ネイティブの方は、「おかえり」も「ただいま」も「Hey.」「Hello.」「Hi.」という言葉のやり取りだけで済ませます。

私もアメリカにいるときは、学生寮で一緒に暮らしていた友人が寮に戻ってきたりしたときは、当然のように「Hey.」と言っていました。笑ってしまうくらい短く、

寂しい感じがしますが、それもそのはずです。なぜならば、アメリカの家庭では基本的に**「ただいま」「おかえり」という言葉を交わす習慣がないから**です。

お気づきのように、「Hey.」「Hello.」「Hi.」や「Welcome back.」「Welcome home.」では日本語が持つ本当の「おかえり」の気持ちは決して伝わりません。

私は、この英語では表すことのできない「おかえり」に含まれている気持ちこそ、**日本人の思慮深さを表していると思つのです。**

では、その表現できない思慮深さとは一体何かというと、それは「すべては当たり前ではない」（縁起^{えんぎ}）と「何が起ころかわからない」（諸行無常^{しよぎょうむじょう}）という真理です。

だからこそ、戻って来た方を見ると、**無意識にも当たり前ではない再会が嬉しくて、また有り難くて「おかえり」という言葉が自然と口から出るのです。**

●「おかえり」の言葉をささえるもの

仏教的な立場から見ると、「おかえり」という言葉の根底には二つの仏教思想が流れています。

一つは「縁起」という教えです。これは、仏教の根本思想の一つで、この世には何一つとして独立して存在するものはなく、物も現象もすべてが繋がっているということの意味します。

そして、もう一つは「諸行無常」という教えです。これは、すべてのものごとには移り変わり、現象としていつ何が起こるかかわらないということの意味します。

昔の日本人は、日本ならではの四季折々の自然環境と生活の調和を大事にし、知恵

を振り絞り、試行錯誤しながら生き抜いてきました。

その中で培った数多くある産物の一つが、無意識にもこの二つの仏教の根幹思想を自覚し、世の中の真理を日常生活の中で理解することだったと思うのです。

だからこそ近所の人は、「よく無事に帰ってきたね」「また会えて、ありがたいね」という温かく深い意味が込められた「おかえり」という言葉を、「こんにちは」という挨拶の返答にされているのだと思うのです。これは西洋にはない、日本独自の精神文化です。

長い間、地元を離れ、近所付き合ひもなく、「個」(自分)に固執するあまり、「他」(周り)への関心が薄れてしまった私自身、日本人が培ってきた「おかえり」という一つの言葉に含まれた奥深い意味と思想を噛みしめ、これからは私が「おかえり」という言葉をかけてあげられるようになりたいと思います。

あいさつの言葉に隠された温かな思い

「よろしくお願いたします」

● 訳にくい言葉

日常生活において、よく口にする言葉の一つに「よろしくお願いたします」があります。人に何かをお願いするときや挨拶をするとき、また今日ではメールの文末には決まり文句のように使用している方も少なくないと思います。

私自身、**無意識によく口から出てしまう言葉**であり、また周りの方からよく受け取る言葉でもあります。

よく考えてみると、私にとってこの「よろしくお願いたします」というひと言は、アメリカで生活しているときに、**一番英語にできずに困ったフレーズ**かもしれません。

渡米した当初、これからお世話になる方をはじめ、さまざまな方にご挨拶をさせていただく日々が続きました。その都度、「よろしくお願いたします」と伝えたいと思うのですが、どう英語で伝えればよいかわからず、ぎこちない表現の英語を言った後に、握手しながら頭を下げるといっておかしな動きをしていたことを思い出します。

しかし、この動作はアメリカで生活して二年、三年経つても変わることはありませんでした。

お恥ずかしながら「よろしくお願いたします」のしつくりくる英語表現を習得することができなかつたのです。

**最終的には諦めて、にこりと笑って握手し、心の中で「よろしくお願いたします」と
呟くようにしていました。**

また、英語でメールを作成しているときも、この言葉をどのように表現すればいいか悩みました。

日本語のメールでは、必ず文末に「よろしくお願ひします」の一文を添えて送信していました。なので英語のメールを作成するときも、どうしても文末に「よろしくお願ひします」を添えたくて、英訳を試みるのですが、どうも上手くいきません。

ネイティブの友人に相談したところ、メールを送信する相手との関係によりますが、「敬具」の意味や「Sincerely」「Yours truly」「Regards」や気楽な結びの言葉として「Best wishes」（幸あれ）、「Take care」（じゃあね）などがあると知りました。

そして、「Thank you」であればどんなときにも無難だということを知って以来、私の中では「Thank you」が「よろしくお願ひします」の英訳だと自分に言い聞かせて使っていました。

● 訳せない理由

しかし、一見、英訳が簡単そうに見えるこの「よろしくお願ひします」という言葉に、どうしてここまで悩まなければならぬのでしょうか。

実は、それもそのはずなのです。なぜならば、元来英語にはひと言でさまざまな意味の役割を持つ日本語の「よろしくお願ひします」のような表現というものが自体が存在しないのです。

英訳をする場合、「よろしくお願ひします」を使う状況ごとに、その言葉の意味を理解した上で英訳しなければなりません。

つまり、**その場面場面で自分が意図することを細かく明確にすること**で、英訳が可能となるということです。

例えば、**何かをお願いするとき**の「よろしくお願ひします」は、依頼したことへの「よろしく」という気持ちを含めて「Thank you in advance.」ひなりのサレ。

また、**初めて出会ったとき**の挨拶で使う場合は「Nice to meet you.」（はじめまし

て)となります。

ちなみに、**面接などをされる際の挨拶**として使う場合は、「Thank you for taking time to meet.」(面接するお時間を作っていただきありがとうございます)などとなります。

つまり、英訳では「よろしく」というものが**何を指しているのかを明確にする**ことが重要になります。

しかし、私自身日本語でこの言葉を使う場合、ときとして何に「よろしくお願います」と言っているのか分からなくなることがあります。

何か目的や意図がなくても、無意識に口にしてしまいますが、相手も特にそれに対して疑問を感じず、「こちらこそ、よろしくお願います」と返答されることもあります。

この場合は、一体お互いは「何」を「よろしく」と言っているのでしょうか。

●「よろしく」が指し示すもの

ここで「よろしく」の意味を確認してみたいと思います。

「よろしく」とは、漢字では「宜しく」と書き、主に「ちよūdōよい具合に」「是非とも」を意味し、人に何かを依頼するときや人に好意を伝えてもらうとき(例、「よろしくお伝え下さい」など)にも使います。

ここでも「何」を「よろしく」なのか明確ではありませんが、**さまざまに「よろしく」の意味を深く掘り下げてみると、ある共通の目的に行き着きます。**

それは、「とりはからう」(取り計らう)ということ。つまり、物事がうまく進むように考えて処理をすることです。

これは特別な解釈ではなく、すでにご存知の方も多いと思います。

しかし、普段から何気なくさまざまな場面で「よろしく」を口にするがゆえに、言葉が形骸化してしまっており、気がつかなかったという方も恐らくおられるのではないのでしょうか。

「よろしく」の前には、目的として、物事の便宜を図ってもらいたいという意図が省略されているのです。

しかし、注目すべきことは、その意図を言葉として表現せずともコミュニケーションが成り立ち、その意図もくみ取れることです。

これはまさに、「以心伝心」を物語っている気がします。

「以心伝心」とは、「心を以て、心に伝う」と読み、元来は仏教（禅宗）用語で、言葉や文字では分からない仏法の真髄を、師から弟子の心に伝えることを意味しますが、現代では文字や言葉を使わなくても、お互いの心と心で会話するということに使われることが多くあります。

この言葉から抽出すべきことは、「信頼」というものです。私はこの「信頼」こそ、「よろしく」が指し示すものだと思います。

「よろしく」とは、自分への便宜を図ることだけを願う一方通行ではなく、相手への便宜も図る対面通行でなければ成り立ちません。

さもなければ、それはただの強要になってしまいます。

よい例が、「よろしくお願いします」と言えば、「こちらこそ、よろしくお願いします」という返答がある場合です。

お互いの「信頼」があって成り立つのが、本来の「よろしく」という言葉なのではないのでしょうか。

相手のことまで考えて口にしていなかった私自身を反省します。多くの方と心から「よろしく」という言葉を交わすことができるように努めていきたいと思えます。